

世界を愛するということ——或る序説——

森 一郎

われわれが目当たりしているのは何か

二〇一一年三月一日、宮城県沖で発生した大地震は大津波を引き起こし、岩手、宮城、福島太平洋沿いの町々に襲いかかった。東北地方の東岸が広域にわたって深々と濁流にのまれ、壊滅させられてゆく。住民は家族を失い、家財を奪われ、難民と化した。戦後最大と言われる被災の甚大さに、われわれは言葉を失うほかなかった。

今回の震災の恐ろしさは、しかしそれではなかった。技術立国の誇る原子力発電所が、津波の襲来をまともに受けて、暴走し始めたのだ。原子炉運転が緊急停止したまでではよかったものの、非常用電源まで止まってしまい、冷却装置が作動せず炉心の燃料棒が破損、原子炉格納容器から爆発音がし、使用済核燃料プールの水が減り水素爆発で建屋が吹っ飛んだ。現場では作業員が決死の覚悟で冷却作業や電源復旧に努めたものの、基準値を軽く超える放射性物質を含んだ冷却水が海中に垂れ流された。半径二十キロメートル以内の地元民が避難させられただけでなく、放射能汚染は陸に広がり、東京も危ない、いや世界規模で汚染は広がりつつあるといった風説が、地球上で乱れ飛んでいるありさまである。

国難とも称されるこの危機は、そう簡単には終息しそうにない。国土荒廃のみならず電力不足に喘ぐ日本経済はすぐには立ち直れないだろうし、迷走した原発との総力戦は長期にわたって続くことだろう。この非常事態下でわれわ

れは、しかし浮足立ったり沈み込んだりすることなく、あるいは犯人捜しや非国民狩りにのめり込んだりすることなく、われわれが目当たりにしている光景の根底にひそむものは何か、じっくり考えることが求められている。一〇年前に同じくその映像が人びとを戦慄に陥れた二〇〇一年九月一日の出来事の衝撃が、テロリズムと戦争との境界を見失わせ、殺戮行為を増殖させてしまったことを、忘れてはならない。今われわれに必要なのは、区別する能力であり、物事を大局的に見極める判断力なのである。

私はこう考える。三・一一大震災によってわれわれが目撃したのは、われわれが築き、住んでいる世界が、壊れてゆくという事態である、と。世界が現に壊れているからには、われわれに課されているのは、自然を愛することではなく、世界を愛することなのだ、と。だとすれば、世界への愛のレッスンを苛酷な試練という形で受けたわれわれは、その試練を——語弊を恐れずに言えば——是とすべきなのである。

私のこの見立てを説明するには、いかに悠長に見えようとも、まずは、「世界」を「自然」と区別することから始めなければならぬ。私はこの区別をハンナ・アーレントから学んだが、それはこれまで概して評判の芳しくない区別立てであった。だが、耳ざわりのいい「自然保護」という大義名分を、大津波という形で世界に襲いかかった自然の猛威が一扫してしまった今、この区別を理解してもらおうことは、はるかに容易になったように思う。

世界と自然との区別

人間という存在者のあり方から、「自然」と「世界」はおのずと分節される。

ヒトという複雑な生き物は、まずもって、他の生物と同じく、とにかく生き、生き延びることを定められて、現に生きている。生命という原理が、ここでの人間の条件である。働いて、食って、寝て、起きて、また働いて……という

同じことの繰り返しを、ひとは日々生きている。循環し回帰する時間は、生きとし生けるものの刻むリズムである。鼓動、呼吸、栄養の摂取・消化・排泄といったレベルから、四季折々の営み、成長と老化、死と誕生、生殖・世代交代まで、生物としてのヒトのあり方は円環性格を示す。これは、動物にも植物にも、山野にも海洋にも、物性にも氣象にも、惑星にも彗星にも恒星にも、等しく見られる。地震や津波もまた然り。十年単位ではありえない大災害でも、百年千年単位では珍しくもないことであり、数万年単位で考えれば、ごく頻繁に起こる現象だということになる。短命な生き物にはいかに新奇に見えようと、太古から続く悠久のテンポからすれば、新しくも何ともない。

そのように、同じことを永遠に繰り返す存在者の全体が、「自然」と呼ばれる。人間という存在者も、そのれっきとした一員である。人間のこの自然的側面を、アーレントは「労働」というあり方にそくして浮き彫りにした。食うために働き、働くために食うことを、生きているかぎり、労働スル動物は続けなければならない。「同じことの永遠回帰」とは、何も難しいことではなく、労働と消費の循環過程がまさにその一コマなのである。

しかし他方で、人間は、自然にただおとなしく従属しているのではない。自然に逆らって、人間ならではのものを生み出し、それを保ち続けようとする。雨露をしのぐための住処を建て、有用なものを作ってはそれを操り、美しいものを創ってはそれを慈しむ。家や通りや街並み、耕地と器具、記念物や文書類、広場や舞台、神殿や寺院が、人間にふさわしい居住空間を形成する。人間が自然の威力に対抗するためには、体力だけでは足りず、暴力を必要とする。自然から勝ち取った素材を、制作スル人は、手と工具を使って加工し、一定の形に造り上げ、巧みに使いこなしては、暮らしを安楽にし、住まいを飾る。そのような人工物は、自然の風化に逆らって存続するという一定の耐久性を示す。死すべき者どもが作り出した産物が、制作者より長生きすることも稀ではない。作られた物には、他の人びとによって使われることが、その意味に属している。持ち主が死んでも、それを受け継ぐ者たちが修理してしつこく使い続け

れば、世代を超えてしぶとく存続する。これは、希少な財宝や美術品だけの話ではない。ありふれた家屋敷や街路の一つ一つ、公共建築からなる都市の全体が、まさにそのような持続性をもつ歴史的存在なのである。

「世界」とは、人間によって生み出され、それなりに永続する物の総体のことである。自然における生命の循環過程とは異なる恒常性と持続性が、世界の時間的性格をなす。どっしりと存在し長期間持ちこたえる、という意味での世界性が、人間の条件となる。働いて食って生きつつ、われわれはわれわれの世界を建て、そこに住み、住み続ける。

「自然と世界とをこのように区別した場合、その「力」の差は歴然としている。自然の有無を言わざぬ「必然性」^{ネセシヤイ}は、人間が道具を駆使して行使する「暴力」をはるかに圧倒する。たとえば、飢えや渇き、用便や性欲といった「必要」^{ネセシヤーズ}にひとたび襲われれば、勇者も貴人もお手上げである。自然界の永遠回帰の一環にすぎない地殻変動の引き起こした大浪が、死すべき者どもの営々と築いてきた町に襲いかかれば、なすすべもないことを、われわれは改めて学び直した。しかも、周期的に学習してもすぐ忘れてしまうこと自体、記憶と忘却という自然的反復現象なのである。出自たる自然に対し、人間の勝ち目はない。

人間という存在者は、生物として自然に属して生きており、かつ人工物から成る世界に住んでいる。この二側面は人間にとって等しく根源的だが、どちらが「人間的」かと言えば、世界のほうである。なぜなら、自然にとって人間の存否などどうでもいいが、世界は人間がいなければ意味をなさないからである。自然は世界を圧倒するがゆえに、人間は自分たちの築いた世界を守ろうとする。自然は人間に守られなくてもビクともしないが、世界は人間によって守られなければ滅びる。「自然を守るう」というスローガンは尊大すぎるが、「世界を守るう」という勧めならまだしも人間の身の丈に合っている。

「環境」という玉虫色の言葉が流通して混乱の元になっているが、たとえばドイツ語では Umwelt と言う。この語を

逐語的に訳せば、「環境世界」である。つまりこれは「人間の身の回りの世界」のことを意味する。田畑や街道はもちろん、森林にしろ河川にしろ、海岸や山頂の景勝地にしろ、人間がその内を動くのにふさわしいように美観を顧慮して整備されているのが、「環境」なのである。

それゆえ、「自然環境を守ろう」ではなく、「環境世界を守ろう」と言うべきなのだ。自然に翻弄されるほかない生き物が、「自然を守る」などと口走るのは、おこがましい。「自然から世界を守る」と言うほうが、正しい人間の用法なのである。

では、なぜ世界を守らなければならないか。それはべつに心優しいからでも同情ゆえでもなく、世界あってこそ人間は自然から守られるからである。世界を守ることは、人間が自分たちの「人間的」生活を守ることに等しい。守り手となってくれる世界がなければ、非力な人間は、自然の猛威になすすべなく曝されてしまう。津波で家を押し流されてしまった人びとが、正真正銘の「アウトドアライフ」を強いられたように。

まとめよう。「環境問題 (Umweltproblem)」とは正しくは「環境世界問題」であり、「環境保護 (Umweltschutz)」とは正確には「環境世界保護」である。われわれが当面しているのは「世界問題」であり、われわれに求められているのは「世界保護」なのである。

世界を破壊するもの

危機に瀕しているのは、自然ではなく世界である。ここから、「自然破壊」という言い方も身の程を弁えない言葉の誤用であり、正しくは「世界破壊」と言うべきだということも理解されよう。生物は個体としては死なない。死ぬのは個々の人間だけである。それと同じく、自然はいつか必ず甦るが、世界は破壊されたままでは滅亡する。

世界を破壊するものとしては、二通りの「主体」がある。一つには、自然が世界を破壊する。これは、今回の地震と津波がはっきりその破壊力の大きさを示した。火山の爆発や、台風による山崩れや洪水もこれに類する。微小なレベルでは、ちりやほこりやさびで世界は日夜自然と汚れる。どんなに家をピカピカに磨いても、翌日にはもう薄汚れている。人間の作ったものはすべて時間が経てば古くなり、年々歳々自然の浸食を受けて崩れていく。それをそのままに放置せず、掃除や補修によって保全と美化に努めることで、人間は自然に対抗しようとする。作られたものは、使い続けられるという仕方ではじめて存続する。保持するためには、定期的に修繕しなければならぬ。作って使っただけでなく、修理し維持するための労苦が必要となる。自然に抗うこの世界保護労働は、その「不毛さ」ゆえに疎んじられがちである。だが、そのような抵抗を止めてしまえば、人間はたちまち降参するほかない。つまり、世界は荒れ果ててしまう。世界を守るには、迎撃ミサイルのような勇ましいものよりも、身の回りの掃除をする地道な奉仕活動のほうが、ずっと重要である。大津波の引いたあとの瓦礫の山の後始末も、そのような世界美化労働（掃除）に属する。「自衛隊」は、もともと世界保護部隊として有意義なのである。

他方で、世界を破壊するのは、自然だけではない。人間自身、世界を破壊することがある。なるほど、自分で作ったものを壊すのは、ある程度まで本人の勝手であろう。たとえば、自分の持ち家を新しく建てるには、古い家を壊さなければならぬ。暴力を不可避的に伴う破壊行為が、世界建設には必要なのである。しかしながら、世界を建立し形成してゆくことと別な仕方では、現代人は破壊と製造をせっせと繰り返している。

堅牢な建物を二、三十年程度で壊しては新しく作るうとする。それは、家を建てて住み続けることに意味を見出すのでなく、もっぱら破壊と製造のプロセスの拡大再生産をめざしているからこそのである。そのテンポは自然の永遠回帰のリズムに近づく。世界の恒常性は自然の新陳代謝に取って代わられる。衣服や食器が、安価に大量生産されては

たちまち使い捨てられる。耐久消費財という奇妙な呼び名をもつ商品も、長持ちしないようにできており、すぐ壊れて新製品にすぐ替えられ、作られるそばからゴミになってゆく。そんな空しいことをなぜするのか。製造する側としては、その循環過程に利潤が発生し、回転を早めるほど増殖するからである。また消費者からすれば、使い捨ての方がラクだからであり、使い続けるより安価だからである。しかも消費者は労働者でもあり、そういう彼らにとって、製造業の景気が良くなり雇用が安定することは望ましいことなのだ。

これは、世界の只中に自然が懐深く入り込み、内側から世界を侵食していることを意味する。もっとも、内なる自然という言い方があるように、人間の世界にはもともと自然が入り込んでいる。ちりやほこり、消耗や磨滅、老朽化といった生成消滅は、生理的欲求や加齢老化と同じく、世界を内側から脅かす自然現象であり、もともと防ぎようがない。じつにこれこそ生命現象そのものなだから。こうした「生ける自然」に付き合うべきが開発されることで、世界はなんとか維持され、人間らしい生活が営まれてきたわけである。しかし今日では、かつては存続させ維持することに意味の認められたものまで、一切合財ひっきりなしに捨てては次々に新しくすることが、「社会」の美徳とされるようになった。労働とともに消費が奨励されるのだから、必然的にゴミは増える。

しかも厄介なことに、そのゴミは放っておいても一向になくならない。消費されたあとで自然に戻るといふ循環のプロセスに帰着せず、抜群の反自然的持久性を示すのが、今日の産業廃棄物の特性である。人間によって初めて作り出されたモノ、たとえばビニールやプラスチックといった化学製品が、その典型である。

アルミ缶やペットボトルは、山野や河川に投げ捨てられても、なかなか腐蝕せず、風雪に耐えて存在し続ける。呆れるほどのしぶとさだが、使い続けられてやがて骨重品となる「物」とは明らかに違って、長持ちするだけ価値が出るわけではない。新品であることが取り柄のはずの消費対象ゆえ、使い終えたあとは消えて無くなってほしいのに、

しつこく居座り続ける。へたに処分しようとすれば毒をまき散らすし、再利用するにはいたずらに多くの手間と費用がかかる。そういう邪魔物に世界は覆い尽くされつつある。

世界は、自然によってのみならず、人間によっても破壊される。しかも、人の手や道具、暴力によってだけではなく、人間の生み出した人工物、いや超人工物によって破壊される。つまり、産業ゴミによって世界は人間の住むところではなくなっていく。ではこれは、世界が世界によって壊されるということなのか。必ずしもそうではない。世界を破壊するゴミとは、世界と自然との区別が取り払われて世界にどっと流れ込んできた「半自然的で半世界的なもの」である。自然的であったはずなのに不自然となったものが、世界の内部で反世界的となり、世界を内側から打ち壊しているのである。

この超ゴミ問題が事柄の核心をなす。原発問題の根もここにある。だが、先に進む前に、別な角度から、世界と自然との区別にもう一度光を当てることにしよう。

善悪の彼岸と此岸

迂遠な話に聞こえるかもしれないが、倫理学の分野に「自然主義的誤謬」という議論がある。Sein(ある・存在)とSollen(べし・当為)とは次元が違っており、前者から後者は導き出せないのに、両者を安易につなげて、自然的なものから倫理的なものを説明しようとする誤りのことを指す。たとえば、「よい・善」という価値規範は、経験的事実によって説明できない。善イコール快樂とか、公共の福祉の増進こそ善そのものだとかいった短絡的発想は、そうした誤謬に陥っている、というのである。この種の誤謬の指摘には胡散臭いものを感じないでもないが、確かにこの指摘には否定しがたい真実が含まれている。つまり、われわれの理解する「自然」は、人間的価値づけから無差別で、

「善悪無記」だという点である。善いとか悪いとかを云々できるとすれば、それは「世界」の内部においてのみなのである。言葉を持ち思慮分別を働かせるわれわれ人間が築き、そこに住んでいる世界においてこそ、意味というものが成り立つ。

「自然的善性」や「根源悪」といった強いテーゼは、特定の教義を前提しなくては主張できない。だからこそ、ニーチェは「生成の無垢」ということを語った。生まれたての赤ん坊が罪なき純粹存在であるように、万物はもともと「善悪の彼岸」にある。永遠回帰の肯定は、「自然」^{ゼウス}を探究した古代ギリシアの哲学者にとって公理であった。ヘラクレイトスは万有を、無邪気に「遊ぶ子供」にたとえた——それがいかに恐るべきゲームであろうとも。あるがままの「存在」に、善悪、正邪、美醜の観念を持ち込むことは、自然界の異分子たる自分勝手な生き物の性である。ホップズの「自然状態」は、無法で危険な「戦争状態」を意味するが、それ自体は邪悪でも不正でもない。スピノザの「神即自然」の観念にも同じことが言える。エデンの園で善悪の知恵を身につけて以来、人類は善悪の此岸^{レウス}に住んできたし、その責めをたえず負い続けてきたのである。

しかし、あくまで「世界内存在」である人間が、自然に相対^{あひたい}するとき、すでにその自然は人間的価値を帯び、意味づけられてしまっている。益虫害虫の区別は自然にはなく、風光明媚とか悪天候とかいった意味づけも人為的である。歯向かってくる相手には容赦なくとも、従順なところがあれば可愛がりたくなるのが、人情である。すでに古代ローマ人は、征服された自然に親しむことを文化人の心得とし、農業に高い地位を与えた。そのようにして自然の一部は世界に編入されるのであり、今日ではこれを称して「環境」と言う。家畜と同じことで、獐猛な自然は憎らしくても、手なずけて温和となった自然は、愛玩物となる。自然を愛し環境を保護しようとする説く博愛主義が、その愛護対象を人類の支配下に置くことを自明視しているように、帰るべき故郷として自然を讃美するロマン主義は、文明によって自

然の威力が剝奪されたことを当然視しているのである。

地震や津波にしても、それ自体は善悪無記である。何万人を殺傷しようと何兆円の損害を出そうと、自然を罪悪視することはできない。そのことをわれわれ人間はみな知っている。自分たちがその下に生まれ、そのおかげで生きている「天」を、恨んでみても仕方ないのだ。この「自然観」と、そこに潜む「存在了解」は、否定しがたく根源的である。

とはいえわれわれは、ひとたび自然災害が起こると、何かまたは誰かに罪をなすりつけなければ、なんとしても気がすまない。いわれない苦しみを背負うことほど、酷いことはないからである。そこで、問題を「人災」にすり替えて議論する。災害対策が十分でなかった政府が悪い、いや緊急時に統率力を発揮できない総理大臣が悪い、式の議論がこれである。

それにひきかえ、原発事故は、明らかに「人災」である。人間が作ったものが災いを招いたのである。だからこちらには猛然と非難の声が沸き起こるし、その標的も見つけやすい。自然による世界破壊には補償を求めることができないが、人間がそこに介入しているとすれば、その「悪行」に対して告発や賠償請求の声が声高に上がる。

ただし、原発の場合、天災と異なる人災だと、たんに片付けるだけはすまされない。世界の内側に自然が入り込んで、その境界自体が攪乱され、曖昧模糊としているからである。むしろこれは、津波が発電所に侵入したことを言っているのではない。発電用の熱を得るためにウランを核分裂させる原子力発電所そのものが、半ば自然的で半ば世界的な混成物ハイブリッドなのである。地中に眠っているかぎりの元素が核分裂反応を起こすことはなく、人間の生み出した道具だけで放射能がまき散らされることはない。巨匠がどんなに技術を駆使して長持ちさせようとした工芸品でも、せいぜい数百年しかもたないのに、電力源として消費されたあとは無くもがなの核燃料は、灰塵に帰するどころか、人類史

が続くかぎり供養してもなお持て余すほどの恐るべき耐久性を示すのである。

なるほど、核分裂という現象は、太陽上ではいわば日常茶飯事であろう。だが、この地上ではそういう現象はまず起りえないし、だからこそ大地は生命の母胎となつたのである。そのような「超自然的」反応が、人間の作つた装置で起るのだとすれば、それは、人間の世界の中に宇宙的自然を導き入れて封じ込めつつ、本領を發揮するようけしかけているに等しい。善悪の彼岸にある自然は、手加減ということを知らない。世界を壊される人間の眼には暴走しか見えないが、自然はその「本性」の赴くまま素直にふるまっているだけの話である。そういう世界内部的自然の脅威が如実に物語っているのは、自然と世界との区別をなし崩し的に廃棄しようとするのがいかに危険であるか、である。しかも、まさにその危険なことを、近代は全体として組織的に行なつてきた。近代の世界破壊的根本動向が今や、原発事故の形で、白日の下に晒されることとなつたのである。

大地から地球へ

近代という大いなる危険の時代の一つの帰結を、われわれは目の当たりにしている。そう言っても言い過ぎでないと思うが、この時代は巨怪すぎて全貌を捉えるのは容易でない。ここでは、「世界」と「自然」との区別に関連する近代の若干の系譜学的事情に話を限定したい。

「自然環境」とよく似た意味で、「地球環境」という言葉が好んで使われる。では、「地球を守れ」と言うのならよいのか。結論を先に言えば、否である。自然を大切にすればするほど、自然の申し子たる労働スル動物が繁殖するだけであるように、近代の基本路線たる「地球化」が進めば進むほど、「大地」は荒廃してゆくだけである。

「地球」なるものは、世界のどこにも属さない。世界に属すると言えるのは、「大地」である。どちらかと言えば、

自然に属しているのが、地球なのである。(英語の earth やドイツ語の Erde はこれまで「大地」と「地球」の意味を判然と区別されないまま使われてきたから、この点では、二語を対比的に使い分けられる日本語に一日の長がある。ようやく最近、「地球」を明確に指示するために、globe (球体) や Planet (惑星) という普通名詞が、固有名詞然と使われるようになってきた。) だとすると、大地と地球との区別は、世界と自然との区別に重ね合わせられるかに見える。だが厄介なことに、事はそう単純ではない。

世界と自然とは、人間のあり方によっておのずと分節される、と先に述べた。しかし、残念ながら、この根本区別は西洋の伝統的概念枠にはピッタリ当てはまらない。ギリシア語で言うと、「コスモス」と「ピュシス」だが、「世界」とは、調和的秩序を具えた万有を全体としてを意味するのであって、人間が築き上げたもの・人工物には限定されない(装飾美や都市国家も「コスモス」だが)。また、「自然」にしても、真なる「本性」という含意をもつかぎりでは、徳とその実現という倫理想に通ずるし、「自然法」という観念は、自然こそ正義の摂理なりという政治思想の支柱であった。だとすると、自然は善悪無記だと必ずしも言えなくなる。「作為的」世界の観念を、あえてギリシア語に探し出すとすれば、ピュシスと対置させられる「ノモス」という語が思い浮かぶが、これだと慣習や約束事という意味が強すぎて、人工物の総体という世界の意味内実からは、いかんせんズレてしまう。これに対し、作為的ならざる自然的世界の大枠をなすのが、「天空」と「大地」のペアなのである。

では、そういった概念的ねじれがありながら、世界と自然との区別とゆるやかに対応づけて、大地と地球との区別にあえてこだわるのはなぜかといえは、それにより「大地」と「地球」という同一物の二通りの呼称の歴史的制約性があらわとなるからである。

「地球」とは、世界ではなく自然に属する一個の存在者である。太陽系を構成する他の「惑星」と並ぶ、動く天体

である。その遊星に生命体が棲んでいることは、そうでないこともありえた偶然的事実にすぎない。人類が生存しているようがいまいが、地球が地球であることには変わらない。

これに対して、「大地」とは、世界の下方に位置し、かつ人間がそこに拘束される固有の場所である。この意味での大地は、世界の上方に位置を占め神々の座となる「天空」と対をなす。大地はその意味からして、不動であり、死すべき者どもがうごめく、世界の底辺である。「大地」と「天空」、「死すべき者ども」と「神的な者ども」が、上下の位階を形づくり不可欠な部分として織り成している秩序体系が、「世界」と呼ばれる。その特性は全体としての調和美にある。

地球は、そうした秩序世界ではなく、「宇宙」に属する。宇宙には、ありとあらゆるものが断片として無差別に属する。それゆえ、恒星としての太陽もまた、宇宙に属する。惑星と恒星という種類の別はあっても、太陽と地球にそれ以上の区別はない。太陽上に存在している水素と、地球上に存在している水素は、元素として何ら変わりがなく、かかるに、天空の神々しい星辰と、大地の卑小な生き物とは、まさに月とスッポンである。大地に光を恵むお日様や、夜闇に輝くお月様は、月下の住人にとって崇拜的なのである。

翻ってみれば、無差別的万有としての宇宙概念は、太陽を「灼熱した金属の塊」と断じ無神論者の嫌疑を受けたアラクサゴラスから、万物を偶然かつ必然に永遠回帰運動を繰り返す全自動機械仕掛けと見た原子論者デモクリトスまでの、古代自然哲学者のピュシス論にも見出せる。それを復活させた近代の唯物論的自然科学は、天地の世界論的差異を廃棄し、ついでに神々の宿りも一掃して、宇宙と自然の統一の説明に乗り出した。ここに成立したのが、「普遍的・宇宙的 (universal)」科学であり、その相関項としての近代的自然概念であった。

「自然」が破壊されないように、「宇宙」は、その構成要素たる「地球」でどんな異変が起ころうと、何一つ変わら

ない。そもそも地球は動く。天にも地にも「普遍的に妥当」する万有引力の法則に従ってひたすら自転と公転を繰り返すのが、「惑星地球」なのである。これと対照的に、「大地」がちよっと動けば、まさしく「驚天動地」というわけで、「世界」そのものが変調をきたす。地殻プレートの周期的微動は、自然現象としては何でもないが、地上に住んでいる人間にとっては、恐るべき天変地異を意味する。世界の光景は一変し、破壊し尽くされて、大地は荒廃をきたす。だが、地球はべつに荒廃しない。破壊や荒廃を受けつけないのが、自然であり地球なのである。

「大地」は、近代という時代において、「地球」と化した。いや、大地が「地球化」を蒙ることによってはじめて、近代という時代が成立した、と言うべきなのかもしれない。世界の下方をなす不動の場所は、にわかに、虚無の宇宙を彷徨う「宇宙船地球号」となった。大地から地球へというこの大変革により、伝統的世界観が崩壊し近代的自然観が台頭してきたことを受けて、ニーチェは「神は死んだ」という言葉を吐いたのである。

守り伝えられるべきもの

だが、変化はそれにとどまらなかった。大地の地球化に伴い、人類もまた、大地の住人から「地球人」と化した。それどころか、遊星を棲みかとし地球号の乗組員を自称する彼らは——「超人」には進化できなくても——今やそれなりの「宇宙人」なのである。

宇宙の構成要素たる地球を仮の棲みかとしているこの新種のエイリアンたちは、地上で何を行っているだろうか。彼らはまさに宇宙人としてふるまっている。つまり、大地改め地球を、丸ごと実験室に見立て、宇宙規模の自然過程を、世界内部的に再現している。人工生命や人造人間の創造といった萌芽的研究のほか、宇宙物理現象としての核分裂反応を地球上に持ち込むという大胆な実験にとっくに従事している。放射能汚染に生命体はどれだけ耐えられ

るかという一点をとっても、まさに宇宙船地球号内をそっくり先端研究所とする新実験にほかならない。宇宙の立場から地球に介入し自然を挑発するこのエイリアンのふるまいが、同時に、世界を築きそこに住んできた死すべき者どもの立場からすれば、世界破壊活動なのである。

「^{ユニヴァーサル}普遍宇宙的」な観点からすれば、大地が荒廃しようが世界が破壊されようが、別にどうでもいい。たまたま太陽系第三惑星に仮住まいしているから「地球人」と称しているのであって、「宇宙人」としては、地球が棲みにくくなれば別の星か何かに移住すればよいだけの話である。宇宙は無差別に果てしなく広がっているのだから。

とはいえ問題は、幸か不幸か、人類はなかなか宇宙人になりきれない点にある。肉体的にも精神的にもそうである。放射線に強い肉体にはなれず、無限宇宙を前にすると思考停止に陥ってしまう。世界の内部で超自然的現象を操作している技術職も、その監督責任を負っている管理職も、清浄な空気を吸わなければ一時も生きていけず、宇宙規模の思索を壮大に展開するどころか、資本の論理とそれに追従する国策といった余りにこの世的な理屈に囚われ続けている。偉業に乗り出している割には、哀れなほど卑小だが、それもそのはずで、ヒトという生き物は、自然に属しはするものの、宇宙空間に生きるなど夢のまた夢、世界内存在にして大地の住人たることを寸毫も克服できないのである。世界を建てそこに住むことを事とする生き物にとって、世界破壊活動は自滅以外の何物でもない。

世界と自然との違いを取っ払い、天空と大地との隔たりを消し去って、人類改め宇宙人が地球に無差別攻撃を開始しているのが、近代の帰結である。エイリアンの襲来によって世界は破壊され、大地は荒廃し、現地人はおのれの住まいを奪われようとしている。強制退避を命じられた原発周辺住民にとって、このいささかSFじみた悪夢が、現実となった。「地球を守れ」と大合唱し「地球に優しい」エネルギー政策を推進してきたのは、誰だったのか。彼ら半宇宙人の地球侵攻がもたらした荒涼たる大地を現に目の当たりにしているわれわれは、守るべき別ものを見出さな

ればならない。それは何か。

「自然を守ろう」のスローガンや「地球を守ろう」のプロバガンダほど虚偽ではないにしろ、「大地を守ろう」と叫ぶのは、やはり大袈裟すぎる。天の恵みと大地の実りとのおかげでどうにか生きていける非力な生き物のセリフとしては、いささか驕っており、だいいち、具体的にどう大地を守ればよいのかピンとこない。この困惑は、「世界を愛せ」と言われても困るといふそれなりに正当な反応と同質であろう。

われわれが守るべきものは、具体的には、われわれ人間が作り、使い、使い続けている物たちである。物は人間の世界を形づくっており、そのおかげで人間の生活が成り立っている。物たちが一定の耐久性をもち長く保たれていくことではじめて、世界は人間にふさわしい住まいとなる。物たちによって世界は守られ、その世界のおかげで人間の生活は守られる。われわれが物を守るのは、放っておけば物はやがて滅びてしまうからであり、物が滅びれば世界そのものが破壊され、われわれの住まいが失われてしまうからである。死すべき者どもが作った物たちは、不壊の自然とは異なり、可滅性を免れない。だが、いずれ滅びるのだから朽ちるに任せればよいとか、すぐ取り換えて新しくすればよいとかいうことには、決してならない。人間が自然に抗して建てる世界の永續性を否定することは、人間の自己否定に等しいからである。

そればかりではない。われわれ人間はおれの死すべきいのちを、種の存続とは別の仕方、物を介して乗り越えることができる。物は、われわれが守り、手入れをして大切にすれば、個体の生命を優に超えて存続するからである。物たちは、既在の人びとが伝えようとしたものを、今日のわれわれに守り伝えてくれたし、われわれによって守られることで将来の人びとへさらに伝えてゆくであろう。物たちの持続性が、世界の永續性を成り立たせる。急いで付け加えれば、物を保守することは、いわゆる保守反動を意味しない。それは新しさの否定であるどころか、むしろ新し

い始まりを守り伝えていくことである。物は古くなくても、物に守蔵される始まりはいつまでも古びず、新たな始まりを生み出し続ける。物を次世代に受け渡してゆくことで、われわれは始まりと始まりとして伝承する。

世界に帰属する人間は、世界への愛を、物を、労働、という仕方とを、傷つきやすい人びとを労働すること（顧慮）と並んで、滅びやすい物たちを労働すること（配慮）という「労働」がそのまま、われわれの世界を愛することなのだ。物への労働は、世界への愛に通じ、しかもそれが同時に、われわれ自身を愛することへと通ずる。

われわれの世界が壊れるのを目の当たりにするとき、われわれはどうするであろうか。世界を放棄し、自然に帰れと叫ぶであろうか。断じて否。われわれは、先人たちが築いてきたわれわれの町を、再建する。町を受け継ぎ、大切に守り、後代に受け渡していくことへと、倦まず立ち戻るのである。存続の危機をくぐり抜けて、われわれは町を愛することを学ぶ。そのようにしてわれわれは、住むことを学び直すのである。

伝えていくべき物を労働することが、そのまま、世界への愛のレッスンなのである。

それと反対に、後代に伝えられるべきでないのいつまでもしつこく存在し続けるモノもあり、こちらは殖やさないので賢明である。一度火が付いたら末代までくすぶり続け、いつなんどき再燃するかもしれない復讐心に、人類は古来悩まされてきた。それでも赦しの奇蹟に望みをつなぐことが、人と人との間にはまだしも残されている。だが、何万年も後にやっと半減期を迎える放射性物質は、一度製造されてしまえばそれこそ取り返しがつかず、半永久的に呪いとなり続ける。赦すことのできるものは、自分のやっていることを当人が知らずに犯した行為だけである。世界を破壊することが確実に分かっているながら、目先の利便や利潤にほだされて核燃料ゴミを大地に投棄している二十一世紀の半宇宙的原子力村民——別称地球市民——の非道を、未来の人類は決して赦すことができないであろう。

自然の永遠回帰と世界への愛

本稿では、世界を、自然に対置させて考えてきた。その場合、自然とは、人間の世界の存続を脅かす存在であった。だが、おのれの出自である自然に敵対しても、仕方がない。自然は、人間にとって脅威であるとともに恵みであり、救いですらある。永遠回帰のリズムそのものが、人間に安堵と解放をもたらす。嵐の夜もいつかは明けるし、疲れても眠ればやがて回復する。どんな苦しみも、和らぎ癒される時がやって来る。進歩も発展もない同じことの絶えざる繰り返しが、生き延びるうえでの慰めや希望となる場合がある。

しかも、永遠回帰が救いとなるのは、自然の懐に抱かれている生き物にとってだけではない。自然に抗して世界を築き、物を存続させていく人間にとっても、同じことの繰り返しだが、一切の努力を水泡に帰す悪夢としてではなく、一種の救いとして訪れることがある。かつて、そのことに、関東大震災とその直後の都市復興事業を遠目で眺めて、はたと思いついた一人の日本人がいた。九鬼周造である。

七年に及ぶヨーロッパ遊学もそろそろ終わりにさしかかった一九二八年八月、九鬼はフランスのポンティニーで講演を二度行なった。その一つ「時間の観念と東洋における時間の「反復」の末尾近く、地震で有名となった極東の国出身の講演者は、同胞国民に向けられたヨーロッパ人の怪訝そうな眼差しを意識して、こう述べた。

五年前、東京の大半を破壊した大地震の直後、我々〔日本人〕は東京に地下鉄の建設を始めた。そのとき私はヨーロッパにいて、「ほとんど百年毎に周期的にくる大地震でつねに破壊されるように運命づけられている地下鉄を、なぜ建設するのか」とたずねられた。私は答えた、「われわれが関心を抱くのは企画〔Enterprise〕そのもので

あつて目的ではない。我々は地下鉄を建設しようとしているが、地震が起これば破壊されるであろう。しかし我々は再びそれを建設しようとする。新たな地震がまたもやこれを破壊するであろうが、しかり、我々はつねに新たに取にかかるとする。〔…〕(坂本賢三訳、『九鬼周造全集 第一卷』岩波書店、所収、四一〇頁以下。〔内は引用者。〕)

時間の観念についての講演の中で、このくだりが何を言わんとするものであったかは、今は問わないでおこう。重要なのは、往時の日本人が震災後に見せた都市復興への不屈の努力が、はるか異国からの故国への視線ゆえに、くつきり言葉にされている点である。大震災に見舞われ東京は壊滅、一瞬茫然としたものの、すかさず市民は首都再建のために立ち上がった。どうせまたすぐ地震が起こるのだから、などと自棄になったりせず、各人は各々の持ち場で都市再建に励んだ。そのとき建てられた地下鉄は、九十年近く経った今でも大都市交通の要をなしている。また、当時頑丈に建てられた学校や大学の建物は、今日なお——重機で無理やり解体されないかぎり——ビクともせず立っている。今後それらだつて震災でやられるかもしれないが、それでもなお人びとは建て直すことだろう。同じことの繰り返しをなし能うことが、ここでは強さとなる。

自然の永遠回帰の前にはなすすべない人間が、にもかかわらず自分たちの世界を築き、再建し、たゆまず継承していくこうとする共通の志が、ここにはよく示されている。世界への愛は、自然への畏怖や畏敬と必ずしも背馳しない。むしろ両者は連携し、相互に涵養されうる。そのことを、今も昔も震災経験はわれわれに再三再四しぶとく物語っているのである。

付記——本稿は、河出書房新社編集部編『思想としての3・11』（二〇一一年六月緊急刊行）に寄稿したエッセイ「世界を愛するということ」の完全版である。いったん書き上げられた原稿を、紙数の制約のため、半分強に圧縮したのが河出版であり、その内容は、「哲学塾カント」（中島義道氏主宰）で五月二二日に行なった特別講義でも述べた。「世界への愛」にための可能的序説の一つという意味もあり、完全版を本紀要に載せさせていたただくことにした。読者のご海容を乞う。

キーワード

世界、自然、大地、地球、物